



2014 年度 エチオピア

教師海外研修報告書



独立行政法人 国際協力機構（JICA）四国支部

【後援】外務省、文部科学省、香川県教育委員会、徳島県教育委員会、高知県教育委員会、愛媛県教育委員会

目 次

教師海外研修とは？

- 教師海外研修の目的／応募条件／派遣期間／募集時期／2014 年度の研修国「エチオピア」について 1
- 教師海外研修のながれ 2
- 海外研修日程 3
- 海外研修レポート 4
- 同行者より／参加者氏名 16

JICA 四国支部 教師海外研修とは？

■教師海外研修の目的

JICA は、諸外国との関係や異文化理解の学習について、国際協力を通じて培った経験や人材、ネットワークを活用し、積極的に支援を行っています。この教師海外研修は国際理解教育／開発教育に関心を持つ教員を対象に、実際に開発途上国を訪問することで、開発途上国が置かれている現状や国際協力の現場、開発途上国と日本との関係に対する理解を深め、その成果を次代を担う児童・生徒の教育に役立てていただくことを目的として実施します。帰国後は、海外研修で得た経験を授業等を通して生徒に伝え、生徒の国際理解を推進していただくことを目的としています。

■応募条件

四国 4 県の国公立・私立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、高等専門学校、特別支援学校教員及び教育委員会の指導主事等で、応募締切時点で年齢が原則 50 歳以下であり、所属長または教頭の推薦が得られる方（JICA から海外に派遣された経験のある方は除きます）

■派遣時期

7 月 29 日（火）～8 月 8 日（金）

※派遣時期は、実施年度により変わります。

■募集時期

毎年 4 月上旬から 5 月中旬

※毎年、四国内全ての学校に応募要項をお送りしています。

■2014 年度の研修国「エチオピア」について

(1) 正式名称

(和文) エチオピア連邦民主共和国

(英文) Federal Democratic Republic of Ethiopia

(2) 政体 連邦共和制

(3) 人口 約 9、173 万人(2013 年:世銀)

人口増加率 2.61%(2013 年:世銀)

(4) 首都 アディスアベバ

(5) 面積 109.7 万平方キロメートル(日本の約 3 倍)

(6) 民族 オロモ族、アムハラ族、ティグライ族等約 80 の民族

(7) 言語 アムハラ語、英語

(8) 宗教 キリスト教、イスラム教他

(9) 一人当たり GDP 374 億米ドル(2013 年:世銀)

(10) 農業(穀物、豆類、コーヒー、油糧種子、綿、サトウキビ、ジャガイモ、チャット<エチオピア原産の常緑広葉樹>)、花卉、皮革(牛、羊、山羊)

【参考】「外務省ホームページ-各国・地域情勢-」外務省



教師海外研修のながれ

1. 派遣前研修:2014年6月21日(土)~6月22日(日) @香川県

【1日目】

JICA 教師海外研修事業の説明、エチオピアに派遣されていた協力隊OB からエチオピア事情や体験談を聞き、研修の流れ・派遣国について理解を深めました。また、向井一朗氏(桜美林大学専任講師(JICAより出向)、開発教育協会理事)を講師として招き、授業で使える参加型手法や教材を実際に体験しながら、学びました。



【2日目】

昨年度参加教員による研修報告及び参加教員間で事前の打合せを行ないました。

2. 海外研修

2014年7月29日(火)~8月8日(金) (11日間)

※日程、詳細は次ページ以降をご参照ください。

3. 第1回帰国後研修:2014年8月23日(土)~8月24日(日) @香川県

【1日目】

2学期の実践授業に向け授業計画を予め作成し、参加教員間で発表を行い、意見交換を行ないました。また、山中信幸氏(柳学園中学校・高等学校 教諭)を講師として招き、「授業づくり」のための注意点や体験・参加型手法について学びました。



【2日目】

過去の参加者による実践授業の発表と質疑応答を行い、過去に教師海外研修に参加した教員との交流の場となりました。

4. 各校での授業実践:2014年9月~2014年12月

帰国後研修で意見交換をした授業計画を基に、各学校で授業を実践しました。

5. 第2回帰国後研修(実践授業報告会):2015年2月14日(土)15日(日) @香川県

【1日目】

2学期以降に各々が実践した授業について発表を行い、その後、実践授業を通して、直面した課題や悩みを共有しました。高知県で国際理解教育に取り組む、坂山英治氏(四万十町立窪川小学校 校長)を講師に招き、国際理解教育を継続して行っていくためにはどうしたらよいか、参加者全員で考えました。



【2日目】

公益財団法人香川県国際交流協会と共催で実施している国際理解教育セミナーにおいて、海外研修の様子や実践授業について、一般参加者に向けて発表しました。セミナーでは、特定非営利活動法人NIED・国際理解教育センターより平野木恵氏を講師として招き、参加型学習の意義や効果、手法について学びました。

海外研修日程

日順	日付	プログラム	滞在先
1	7月29日 (火)	関西空港発(23:40 発)	日本(機内泊)
2	7月30日 (水)	関西国際空港→ドバイ→アディスアベバ空港着(13:30) JICA エチオピア事務所訪問 ・JICA エチオピアの事業概要説明 ・安全対策・健康管理ブリーフィング	アディスアベバ
3	7月31日 (木)	・教育セクター説明(JICA事務所) ・アディスアベバ教育局・理数科担当者との意見交換(アディス・アベバ教育事務所) ・教育省理数科教育改善センター長との意見交換 ・チャンピオンショップ(MUYA ETHIOPIA)見学	アディスアベバ
4	8月1日 (金)	アディスアベバからアセラに移動 【青年海外協力隊活動現場視察】 ・アセラの教員養成大学視察 K 隊員(職種:コンピューター隊員) ・小学校視察 H 隊員(職種:理数科教師) ・アディスアベバ活動ボランティアとの意見交換会	アセラ アディスアベバ
5	8月2日 (土)	アディスアベバからジンマを經由しボンガに移動 ジンマで青年海外協力隊員、シニア海外ボランティアと意見交換	ボンガ
6	8月3日 (日)	ボンガにてコーヒーフォレストの散策 (農家に立ち寄り、農家の人々と交流、コーヒーセレモニー体験、 伝統的な住居の見学) ハチミツ農家訪問(養蜂場の見学)	ボンガ
7	8月4日 (月)	ボンガからアディスアベバへ移動 【JICA 技術協カプロジェクト現場視察】 シャベ郡サバカコーヒー協同組合訪問(ベレテゲラプロジェクト)	アディスアベバ
8	8月5日 (火)	・アディスアベバ市内で教材購入 ・日本大使館への表敬訪問 ・国立博物館見学	アディスアベバ
9	8月6日 (水)	【カイゼンプロジェクトの視察】 ・靴製造会社 OKJamaica の工場見学 ・Ethiopian KAIZEN Institute(EKI)本部訪問 【青年海外協力隊活動現場視察】 ・職業訓練校視察 K 隊員(職種:皮革工芸)	アディスアベバ
10	8月7日 (木)	・帰国報告会(JICA エチオピア事務所) ・アディスアベバ発(16:10 発)	アディスアベバ (機内泊)
11	8月8日 (金)	関西空港着(17:30 着)	日本

海外研修レポート

1日目、2日目 2014年7月29(火)、30日(水)

- 1) 記録者: 森本 美緒
- 2) 訪問先: エチオピア共和国
- 3) 研修内容:
 - 空路移動 関西国際空港→ドバイ→アディスアベバ空港、ホテルチェックイン
 - JICA 所長・次長面談、齋藤さんと宮坂さんから全体ブリーフ(安全対策)
- 4) 所感:

いよいよエチオピアの首都、アディスアベバに降り立った。アフリカということで想像していたより大変涼しく町も著しい発展の様子が窺えた。

JICAの事務所に赴き、所長との面談で本研修参加の4名が、それぞれエチオピアに対して抱いていた思いを語った。研修の前にアンケートを準備していた者、研修後の実践に向けて着々と調査を続けていた者、アフリカへの憧憬の念を語る者、文化やエチオピア正教について関心を持つ者…おのおのが強い関心を持って研修に臨んでいることが窺えた。その後安全のためのブリーフィングを受けた。ホテルに着いたら、ロビーで明日のプレゼンに向けての準備をした。明日はアディスアベバの教育局及び教育省理数科教育改善センターで日本の教育について説明のプレゼンをすることになっていたからである。

アディスアベバは標高が2400mと高いため、高山病から来るとされる頭痛を訴える方がいた。1日2Lの水分補給と十分な休養が必要であると云われ、それぞれの健康管理も大事であると痛感した。その後その方は復調していったのでよかったと思う。

最初の2日間だけでも移動距離、場所、内容等非常に充実しているように感じた。今後も有意義な研修にしたいと思う。



ドバイ発アディスアベバ便



アディスアベバ空港



町並みの風景

3日目 2014年7月31日(木)

- 1) 記録者: 富阪 亜樹
- 2) 訪問先: JICAエチオピア事務所、アディスアベバ教育局、教育省理数科教育改善センター、
チャンピオンショップ(MUYA ETHIOPIA)

3) 研修内容: 教育の行政側の視察

- 教育セクター説明(JICA事務所)
- アディスアベバ教育局・理数科担当者との意見交換(アディス・アベバ教育事務所)
- 教育省理数科教育改善センター長との意見交換
- チャンピオンショップ(MUYA ETHIOPIA)見学

4) 所感

今日一日は、教育デーである。エチオピアの教育を知るためにアディスアベバ教育局(日本でいう首都の教育委員会)、教育省(日本でいう文部科学省)を訪問する前にJICA事務所でエチオピアの教育システムについての説明を伺った。

①教育制度…初等教育8年(第1、第2サイクル)後、小学校修了試験を受け、中等教育(第1サイクル2年)へ進む。その後の全国試験を受けた結果により3種類の学校へ進む。中等教育第2サイクル(2年)あるいは職業訓練校、教員養成学校である。中等教育第2サイクルを受けた生徒は大学入学試験を受け、その結果で進学する大学が決定する。試験の成績で進路が決まり生徒の希望通りにはいかない。②就学率…この10年の伸びは大きく、2012年で86%(初等教育)と高く、1700万人が学校へ通う。だが、初等教育を修了するのが約70%である。③教育の公平性…女子の就学率が高まりつつあるものの、男子84%・女子79%と差がある。また都市部と地方の格差もある。④教育の質…学習到達度が50%を超えた児童は、全ての教科で10%~25%であった。読解力試験の結果も低く、教育の質には問題がある。

エチオピアの教育的課題は大きく4つである。①教育の質の向上、②中等教育の供給、③就学率男女差、地域差の縮小、④最も脆弱な層への教育アクセスの拡大である。課題解決のため、2011年からエチオピアでは、日本の協力のもとSMASEE(中等理数科教育強化計画プロジェクト)を実施し、理数科教育に力を入れている。さらに日本の青年海外協力隊、シニアボランティアなどにより教師の指導力向上を図っている。

エチオピアの教育の現状と現在力を入れているSMASEEについて大まかに知り、いよいよアディスアベバ教育局を訪問し、理数科担当者のメコネンさんとお会いした。まず、日本の小学校・中学校の教育について、教育制度、日課、授業風景、校舎教室等の設備などの写真、特別活動などの動画などを見せながら英語で説明を行った。私たちが普段行っている職員朝会、朝の会、掃除などに関心をもたれた。目的は?時間は?日本では当たり前なことが、ところ変われば理解できないものであることに驚いた。しかし、研修を通して、掃除や整理整頓など日本人の道徳的な言動、考え方がいかに素晴らしいものであるか、教育・産業等でどれだけの効果を生むのか実感した。今後、日本の教育に自信をもって取り組んでいきたい。

午後からは教育省を訪れ、理数科教育改善センター長らと面談した。緊張している私たちを笑顔で迎えて下さった。目の前でコーヒーセレモニーを行い、エチオピアの茶菓子コロをいただきながらの面談で、やや緊張もほぐれた。ここでも日本の教育についてのプレゼンを行った。そしてエチオピアの教育

改善センターの紹介、目的や責任、SMASEEの活動等について説明を受けた。この国では全国試験で思うような結果が出ず大学へ行けなかった人たちが、教育養成大学へ行き、教員になっている。この教師の指導力をいかに向上させるかが最大の課題であった。「教員が説明して黒板に書く」という形の授業を、「生徒参加型(体験重視)の授業」へと大きく転換を図ろうとしている。先生の世代も言葉だけの授業を受けてきているため、実験を見ることも実際に行うことも経験がないらしい。教員の質をあげるために、研修を行う指導者を育成し学習内容や指導スキルを普及させていく教師の研修システムをつくっていた。教育の重要性を感じ、国のプロジェクトとして進められているSMASEE。エチオピアが日本の教育を参考に改革している現状、その行政の取組に感心した。また教育をかえようと国を動かしている方々との出会いは、強く心に残った。

次にMUYA ETHIOPIAを見学した。この工房ではエチオピアの伝統工芸“黒陶工房と綿織物”に取り組む職人さんにお会いした。伝統を守るエチオピアの若者の力、自国への誇りそして技術力の高さを見せていただいた。



エチオピアの教育セクターについての話



アディスアベバ教育局の訪問



教育省での意見交換



MUYA ETHIOPIA 職人による綿織物

4日目 2014年8月1日(金)

- 1) 記録者: 布川 匠二
- 2) 訪問先: 教員養成大学(アセラ)、小学校
- 3) 研修内容:
 - 教員養成大学 教員養成大学の様子の視察
 - 小学校 小学校の様子の視察
- 4) 所感:

アディスアベバから途中休憩はさみ、4時間ほどかけてアセラに到着した。まず教員養成大学を訪問し、窪田隊員から大学内を案内してもらった。窪田隊員はコンピュータの指導者として、アセラの教員養成大学で勤務されている。コンピュータ室は備品が想像以上に充実しており、学習環境が整っていると感じた。しかし、理科室は実験器具や薬品が少なく、また、故障したものもあり、教材研究等を行い指導力を向上させていくには少し不十分であるように感じた。図書室も見学することができたが、自習席で私たちに目もくれず熱心に勉学に取り組んでいる学生が印象に残っている。

その後、教員養成大学を離れ、理数科教師である星加隊員から勤務されている小学校を案内してもらった。雨季休業中であつたので、実際の授業の様子を見ることはできなかった。理科室と教室の様子だけみさせてもらった。こちらの理科室も実験器具や薬品は少なく、話を聞くとなかなか授業で実験や観察を取り入れることができていない現状であることを教えてもらう。エチオピアでは実験や観察をしたことのない先生が、自らの経験だけで授業をしてしまい、実験や観察を取り入れず、教科書を読むだけになっている。そのため、生徒が何か作業をすることはあまりなく、意欲が出にくく、またわかりにくい授業になってしまっているらしい。エチオピアは国をあげて理数教育に力を入れていると聞いたが、実際の現場ではなかなか難しい現状であると感じた。

しかし、少ない器具の中、何とか実験や観察を授業に取り入れようと、実験器具を手作りして工夫している星加隊員の姿は立派であると感じた。手作りの水の電気分解装置は人の温かみがありとても感動的であった。

2人と別れて、再び4時間ほどかけてアディスアベバに帰る。夜はレストランで協力隊員の方と夕食をとる。活動内容や勤務する上で困難なことなど様々な話を聞くことができた。

実際の教育現場に足を運ぶことができ、隊員さんの生の声が聞けとても充実した1日となった。



手作りの水の電気分解装置



小学校の理科室の様子



隊員さんの夕食会

5日目 2014年8月2日(土)

- 1) 訪問先:加藤 紘子
- 2) 記録者:移動日(アディスアベバ→ジンマ→ボンガ)
- 3) 研修内容:
 - 車窓から風景を見る
 - ジンマで隊員(理数科教師)と懇談
- 4) 所感:

10時間の長移動日。車窓から見えるのは、広大な平原、生い茂る木々、色とりどりの花々など、これまでいただいていたアフリカのイメージとは全く異なる、美しい景色でした。草原では牛や羊、ヤギなどの家畜が草を食み、牛を使って畑を耕す穏やかな時間が流れていました。新しく舗装されたばかりという道路沿いには、1人でたたく男性や、水汲みや洗濯帰りで楽しそうに会話する女性たち、薪運びや家畜の世話を手伝う子どもたちが行き交っていました。はじめは家畜の横断で車が止められるたびに、「なんでこんなところを家畜が通るの」とあきれていましたが、こういった地方では、実は車のほうが新参者で、私たちはこの古くから続く営みの中を「通らせていただいている」という感覚へと次第に変わっていきました。窓から見えるものすべてが新鮮で、360度に広がる壮大な景色と人々の表情からエチオピアの豊かさを感じる1日となりました。

ジンマで出会った隊員さんは3人とも理数科教師という最強チームで、お互いに相談したり気遣いあったりしている家族のような雰囲気でした。3人の姿を見ていると、隊員同士の情報交換や支え合いも、海外で活動するうえでは大切なのだなと感じました。



車窓からの景色



牛耕の様子



行きかう人々



家畜の群れ

6日目 2014年8月3日(日)

- 1) 記録者: 森本 美緒
- 2) 訪問先: ボンガにてゲラ コーヒーフォレスト、ハチミツ農家訪問
- 3) 研修内容:

●コーヒーフォレスト散策

熱帯雨林の中を歩きながら、フォレストコーヒー園を見学した。その後農家に立ち寄り、農家の人々と交流を深めつつコーヒーセレモニーを体験したり、住居を見学した。

●ハチミツ農家訪問

バルタの滝を見たあと、ハチミツ農家に立ち寄り、箱型の養蜂場を見学した。

4) 所感:

前日はボンガに向けてほぼ一日かけての大移動であった。快適であったアディスアベバでのホテルと比べ、ここのホテルはボンガの人の生活を身近に体験することができる。まず断水が2ヶ月続いているとのことで、ホテルの人々は湧き水を宿泊客のために汲みおいてくれた。電気が通じていたのは幸いであった。学校では子どもたちに「水は貴重だから、大切に使いなさい。」とよく言ったものであったが、身をもって体験してみると、その言葉の重さを痛切に感じた。

この日はまず更に高地に車で移動し、カファのゲラ ワイルド コーヒーフォレストを見学した。KAFKAはカフェ…コーヒー発祥の地と云われている。フォレストに足を踏み込むと雨期で地面がぬかるんでおり、進むのに苦労した。いわゆる熱帯雨林を目にするのは初めてであったが、日本の5月に値する美しい緑に囲まれていた。森林の中であるのにあちらこちらから現地の人たちがやってくるのを見て、驚嘆した。またここでは木の上で養蜂も行っており、何十メートルもある木をのぼり、伝わって巣箱を取っていくと聞いて驚いた。ここでは熱帯雨林の中でコーヒーが育てられており、「フォレスト コーヒー」としてプレミアをつけて販売しているそうである。

次にコーヒー農家に立ち寄り、農家の人と親交を深めながらコーヒーセレモニーを体験した。セレモニーは火を起こし、コーヒー豆を煎るところから始まり、豆を木の臼で挽き、ポットで煮出した。周りには薪の煙とコーヒーの芳香が広がる。一杯目はまず客人に振る舞われた。大変濃厚で美味しい。また畑でとれたゆでトウモロコシも配ってくれた。食感がモチモチしている。コーヒー農家と云えども、収穫シーズンは年に一度だ。トウモロコシなどの野菜やテフ、牧畜業と多角的農業が生活する上では原則である。

ある先生は紙風船を取り出し、子どもたちと楽しく遊んでいた。もう一人の先生は英語が上手な男の子に将来の夢を聞いていた。

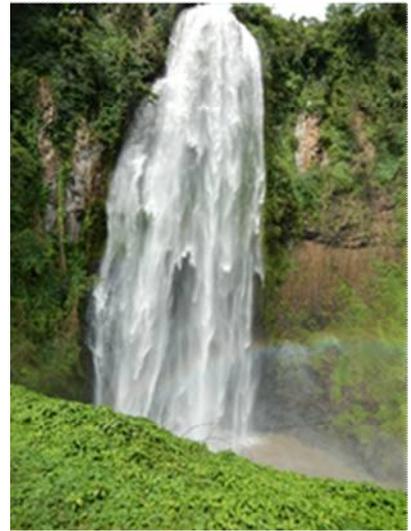


コーヒーフォレストの入り口



コーヒー農家の人たち

コーヒーを嗜んだあと、家の中を見学させてもらった。数々の宗教画やクロスに敬虔なキリスト教徒としての生活が窺えた。女の子が箒を出し、散らかった床を掃き清めていた。そういえば少しシャイな次男の子はセレモニーの時母親にそっと椅子を差し出したり、コーヒーやトウモロコシなどを一人一人に丁寧に手渡してくれたりしていた。ここでは家族がお互いを思いやりながら、力を合わせて生活をしている。日本では遠く忘れ去られた大切なものがあるような気がした。仲良くなったコーヒー園の人たちに別れを告げ、昼食(もちろんインジェラ)を取った後、建設中のコーヒーミュージアムを眺めながら、車で移動し、ハチミツ農家に向かった。農家の人がガイドになり、まずバルタの滝を目指した。ここでもぬかるみに足を取られながら何回も転びそうになり、優しいハチミツ農家の主人や近くに住む子どもたちに助けられた。たどり着いたときの滝の美しさは忘れ



バルタの滝

ることはできない。しばし感動のあまり立ち尽くしていた。しかし、その直後もと来た道を思い返し、「果たして私は今日帰り着くことができるのか。」と言いたいような不安にとりつかれた。帰り道も苦労しながら歩き続け、ようやくハチミツ農家のお宅にたどり着いた。ここでも主人のお母さんがコーヒーセレモニーで我々をもてなしてくれた。添えられた葉の香りがさわやかであった。ハチミツ付きのパンも振る舞われ、ようやく一息つくことができた。

このハチミツ農家は低地で巣箱を置いて、白い美しいハチミツを作っている。ハチミツは日本の有名百貨店でも販売されているそうである。コーヒーフォレストで説明を受けたような木の上での養蜂ではなく、新しい方法(日本とほぼ同じ)を取り入れるには数々の苦労があったそうである。また大抵の製造農家は取引先が安定すれば更に生産を拡大していくことが多いが、主人はあくまで自分の目の届くところで高品質な商品を作っていきたいと語っていた。その心根に打たれ、私たちはハチミツを購入した。名残惜しさを感じながらハチミツ農家の方に別れを



ハチミツ農家の主人

告げ、車の置いてある広場へ行ってみると子どもたちがサッカーをしていた。我々をみつけるとサッと寄ってきた。日本の子どもたちにメッセージをお願いすると、「ペンとノートを下さい。」と大声で言った。途上国とはいえ、GDPのめざましい上昇を遂げるエチオピアである。人々はその恩恵を受けるのはまだまだ先ということなのだろうか。厳しい現実を突きつけられた思いであった。

帰って夕食のインジェラを食べ、振り返りの会をとったが、お互い疲れきり、明日の予定を確認するにとどまった。実に日頃の体力作りを痛感する一日であった。

7日目 2014年8月4日(月)

- 1) 記録者: 富阪亜樹
- 2) 訪問先: シャベ郡サバカコーヒー協同組合
- 3) 研修内容:

●シャベ郡サバカコーヒー協同組合訪問…ベレテゲラプロジェクトで支援の様子を知る。

- 4) 所感:

ボンガ地区を9時に出発し、首都アディスへ向かった。今日は長距離(バスで約10時間)の移動中心の1日である。途中一ヶ所、シャベ郡サバカコーヒー協同組合を訪問した。

エチオピアの森林は減少・劣化しており、森林保全のため管理されている森林は国土面積の約2%である。そのため、このベレテ・ゲラ森林優先地域をターゲットにし、参加型森林管理の体制が整備されてきていた。そして今ある農地を生かして生産をあげようという取組が行われている。森林内に自生しているコーヒーに国際認証という付加価値をつけ、協同組合を通して販売を広げている。エチオピアのコーヒーは無農薬、無化学肥料生産である。日本の企業とJICAの協働で、豆の選別、乾燥方法の指導により、品質改善が行われ、日本の商品として取り扱うレベルに品質が向上している。熱心な話の後、コーヒー豆を洗う自慢の機械を見せていただいた。300万円する装置で、1時間で80kgの豆を処理することができ作業の効率化が図られていた。また収穫後のコーヒー豆の処理方法には、a水洗式とb乾燥式の2種類ある。abとも長所短所がある。また輸入国によってコーヒーの味わいには好みがあるようだ。そこでヨーロッパ諸国にはa方式、日本にはb方式というように、相手国に合わせたビジネスを展開しつつある。

こうした取組により、収入も向上している。利益が上がったことで農家の配当も増え、家畜の購入、家の立て直し、教育への出費など生活の向上が見られているということだった。日本や企業との協働により、少しずつ生活が改善されていく実態を見ることができ、日本の働きの大きさを感じた。いずれは日本の手を離れ、自分たちで全てを運営し、自立していけるよう、エチオピアの未来を考慮した支援をしている日本の取組に感動した。



サバカコーヒー協同組合での説明



水洗式機械…豆の投入口



水洗式機械…豆の取り出し口



ついてきた人懐っこいエチオピアの子どもたち

8日目 2014年8月5日(火)

- 1) 記録者: 布川匠二
- 2) 訪問先: ピアッサ地区、日本大使館、シロメダ地区
- 3) 研修内容:

- ピアッサ地区: エチオピア教材を購入した。
- 日本大使館: 鈴木大使から国際理解教育を進めていく上でのポイントを伺った。
- シロメダ地区: エチオピア教材を購入した。

- 4) 所感:

前日の移動の疲れが少し残っている中、午前中はエチオピアの教材の購入に出かけた。ピアッサ地区などを訪れ、エチオピアの伝統工芸品や雑貨を見てまわる。どのような授業にしていくかを考えながらエチオピアのマーケットに出かけると、いろいろ考えすぎて時間が経つのが早く感じた。値段も交渉次第で下がってくるので、少しでも安く買おうとみんな必死になっていた。私は少しの空いた時間に、路上にいた少年に靴磨きをお願いした。たった 2 ブル(日本円で約10円)で靴の隅々まで丁寧に磨き上げ、しっかりと仕事をしている姿に感動した。

お昼ご飯は、韓国料理店へ。インジェラ(エチオピアの主食)以外のものを食べて、少し胃をリフレッシュすることができた。

午後からは、エチオピアの日本大使館へ表敬訪問。大使館に入る前は少し緊張した。鈴木大使から国際理解教育を進めていく上では理論を大切に、順序立てて物事を考えていく習慣を身につけていくことが重要であると教えていただいた。鈴木大使の体験談を交えた話は、とてもわかりやすく印象深いものであった。この話をぜひ日本の生徒に伝えていきたいと思う。

大使館を出た後は、国立博物館へ。エチオピアで発見された 320 万年前の女性の化石のレプリカなどをみることができ、人類の進化やエチオピアの文化の変遷などを追うことができた。その後は、再び教材の購入へ出かけた。エチオピアの教科書や民族衣装を購入することができた。エチオピアの教科書は日本の教科書に比べると、絵や資料が少なく文字ばかりでわかりにくい。内容も非常に高度であり、学習意欲もわきにくいのではないかと感じた。民族衣装は露店が一同に並んでいる地域で購

入。民族衣装の種類と数、露店の多さに驚いた。宗教に対する考え方が日本とは異なっていると改めて感じた。

夕食は中華料理店へ。中国系の企業がエチオピアに多く進出していることから、客の多くは中国人であった。

心もお腹も満腹になった一日であった。



国立博物館



日本大使館表敬訪問



ピアッサ地区

9日目 2014年8月6日(水)

- 1) 記録者:加藤紘子
- 2) 訪問先:OK Jamaica、Ethiopian KAIZEN Institute(EKI)、職業訓練校
- 3) 研修内容:
 - Kaizen 導入工場の見学
 - EKI の専門家の方々との意見交換
 - 皮革工芸隊員の活動先訪問
- 4) 所感:

最初に「カイゼン」が導入されている靴製造会社 OKJamaica の工場を見学しました。ちり一つ落ちていない清潔な床、品目ごとに整理された棚、そして黙々と働く従業員の姿が印象的でした。「カイゼン」の基礎である5S(整理、整頓、清掃、清潔、躰)が定着しているこちらの工場では、1日あたり96足だった生産数が、「カイゼン」導入後5ヶ月で、3倍の288足まで伸びたそうです。また、従業員がKaizen Promotion Team とよばれるグループを組織し、アイデアを出し合いながらさらなる改善につとめているとのことでした。今回の見学で、職場の環境改善が生産性や従業員の意欲を向上させるということ、そして経営者だけでなく、従業員の満足度も上げているということがわかりました。教育の現場においても、「教室環境を整えよう」と当たり前のように言われていますが、その理由がエチオピアに来てわかった気がします。

続いて訪れたEKI本部では2名の職員の方が、「カイゼン」の概要と今後について話してくださいました。「カイゼン」は①理解しやすい②適用しやすい③お金がかからないという理由でこれまでも、いくつかの途上国で取り入れられてきたそうです。なかでもエチオピアでうまく浸透したのは、素直で真面目な気質をもったエチオピアの国民性にあるのではないかと指摘されていました。着々と成果があがっているエチオピアでは次の段階として、サービス業や公共機関などへの対象拡大、統計学や推計学を活用した高度な「カイゼン」への取り組みが始まっています。

最後に皮革工芸の隊員さんに職業訓練校を案内していただきました。こちらの学校では木工や電気関係、自動車修理や皮革加工などの基礎的な技術を1~3ヶ月の短期間で習得することができます。ここに通う生徒の中にはエチオピアならではの課題を持った生徒も多く、先生方は技術だけでなく、道具の使い方から生活全般の指導にも取り組まれているとのことでした。



OK Jamaica 工場内の様子



整理された棚



職業訓練校での作品

10日目、11日目 2014年8月7日(木)、8日(金)

- 1) 記録者: 森本美緒
- 2) 訪問先: JICA エチオピア事務所
[帰路: アディスアベバ空港~ドバイ空港~関西国際空港]
- 3) 研修内容:
 - 皆川 JOCV のエチオピア雑貨販売会
 - JICA エチオピア事務所報告会
- 4) 所感:

9 日間にわたるエチオピア研修もいよいよ今日で最終日である。JICA のスタッフや隊員、エチオピアの人々との数多くの出逢い、様々な事物の見聞があり、長いようで大変短かったように感じた。幸い体に不調を訴えることもなく、健康に過ごせたのは小坪さん、宮坂さんをはじめとする JICA スタッフ、どんなロングドライブも厭わず安全運転を続けるドライバーの方々、時にくじけそうになっても温かく接してくれた富阪先生、加藤先生、布川先生のお陰であるとひしひし感じている。

最終日は些か馴染みができた JICA 事務所に出向き、皆川さんらのエチオピア雑貨販売会で絵葉書、コーヒー茶碗などを買い求めた。そして JICA のスタッフを前にして今回の研修の報告会を行った。それぞれ写真を 3 枚選び、コメントを述べる報告会であった。現地の新聞にもプレゼン発表が取り上げられた布川先生は、スタッフのありがたさ、普段何気なく使っていた水の大切さを語り、常にメモと写真を絶やさなかった富阪先生は、今回の研修を通して感じたエチオピアの文化を子どもたちに伝え、未来を担う子どもたちが世界のためにできることを考えさせていきたいと語った。JICA の隊員やスタッフの方々のプロフィールをビデオに撮り続け着々と取材を進めていた加藤先生は、改善プロジェクトの素晴らしさを述べ、この内容を



報告会の打ち合わせ

是非中学校の子どもたちに逆輸入したいと熱く語った。自分もエチオピアの子どもたちが家族とともに力を合わせて生きている姿から日本の子どもたちに真の幸せとは何かを考える機会を持ちたいと述べた。

そして小坪さんがエチオピアで得たたくさんのお出逢い、文化に愛着を感じ、また来訪したいと語り締めくくった。その後スタッフの方々との質疑応答をし、報告会を閉じた。自分としては「エチオピアにあって日本にないものは何だと思えますか？」の質問にハッとしました。エチオピアの子どもたちは貧しい生活を送っているのにかかわらず常に明るく笑っている。家族とつながっている。少なくともエチオピアの子どもたちは家族といるとき何より幸せなのではないだろうか。少しうらやましい気がした。

その後アディスアベバ空港に向かい、再びトランジット 5 時間の長い空路の末帰宅の途についた。エチオピアを離れるとき何度も何度も下の風景を見返した。楽しく意義深い研修であった。このような機会を与えてくれた職場や家族の人たち、学校や教育委員会の方々、そして陰になり、日向になり支えてくれた JICA の方々に心から感謝の意を表したいと思います。

ありがとうございました。



やっと出会えたチマキ



エチオピアでお世話になった皆さんと一緒にパシャリ！！

同行者より

～世界を見て、考えた～

2014年度の教師海外研修は、5名での出発でした。事前にエチオピアの任国事情を聞くなどの事前学習をして参加したけれど、ほぼ全員が初めてのアフリカに、少し緊張の面持ちでの研修開始になりました。

エチオピアの経済成長率はアフリカで2番目と言われるとおり、街には建設途中の建物があちこちに見られ、まさに成長中の印象を受けました。活気あふれる首都アディスアベバの様子、緑あふれる風景のジンマ、ボンガも、今のエチオピアであることを肌で感じました。この研修では、人との触れ合いも大きな印象として残りました。重いものを運ぶ時はさっと手を貸してくれる優しさ、コーヒーセレモニーでのおもてなしの心、短い期間でしたが、人の優しさにたくさん触れることができました。

また、現地で活動するボランティアの活動内容は多様ですが、共通しているのは日本とは生活環境が違う中でたくましく生きており、笑顔はまぶしく輝いていました。教育省の方々のとの意見交換の場、技術プロジェクトのサイト視察等、エチオピアの様々な場所で、日本の技術や制度が注目され活用されていることも、実際に見ないとわからない発見でした。

研修中、先生方はすべての視察先で熱心にメモを取り、授業にどのように生かそうかといつも考えながら研修に挑まれていました。

そして2学期、研修での驚きや発見、感動を、現地で入手したものや写真を使い、授業を通して生き生きと児童生徒に伝え、新しい世界を広げてくださいました。この教師海外研修は、国際理解教育に役立てていただく目的で実施していますが、授業を参観させていただいて、児童生徒たちに広い世界を伝えることで、素朴な疑問や質問が出てきて好奇心が広がっていくのだと感じました。世間はたくさんの情報にあふれ、知ったつもりでいることがたくさんあります。しかし、外国や開発途上国で実際に見てきた人々から直接聞くと、自分と考えていたことと違ったりして、まだまだ驚くことがたくさんあると思います。そんな経験の積み重ねが、学ぶ意欲を高めていると感じました。そんな点からも、開発教育を実施する意義は大いにあるのではないかと考えました。

是非、この研修での驚きや発見を引き続き、たくさんの児童生徒に伝えていただき、日本の子ども達の世界が広がっていけばいいなと思います。

JICA 四国 小坪 鈴恵

参加者氏名

氏名	県名	所属先	担当教科
富阪 亜樹	愛媛	松山市立生石小学校	小学校全科
加藤 紘子	徳島	名西郡石井町石井中学校	英語
布川 匠二	徳島	名西郡神山町神山中学校	理科
森本 美緒	徳島	徳島市城東小学校	小学校全科、英語活動
小坪 鈴恵	香川	JICA 四国支部	同行者



国立博物館でパシャリ！